

未明の特別警報

早期避難に難題

九州に甚大な被害をもたらした豪雨で、熊本県

は犠牲者の約8割が溺死や溺死疑いだったと明らかにした。逃げ遅れが多かったとみられる。集中豪雨は発生場所や雨量を予測しにくく、気象庁が大雨特別警報を出したのは未明。災害弱者らにいち早く避難を促す難しさが浮き彫りになった。

気象庁によると、熊本県内に大雨特別警報が出たのは、日の出前の4日午前4時50分。大災害が起きる恐れがあり、住民に避難を求めるものだ。すでに県内各地で大雨が降り、発令直後に球磨川で氾濫が発生した。

同県八代市は4日未明、流域の住民に避難を防災無線などで呼びかけた。4〜7日に消防ヘリ

タ人も少なくなかった。市危機管理課の担当者は

「雨がひどくなる前に特別警報が出れば、避難ももう少し進んでいたかもしれない」と振り返った。

同県球磨村でも避難指示は4日午前3時半。球磨川の支流が氾濫し、特別養護老人ホーム「千寿園」の入所者14人が死亡した。当直職員らが高齢者を2階に避難させた

が、車椅子や寝たきりの入所者もあり、退避に時間がかかったという。熊本県によると、13日

時点で県内の死者は64人。死因が判明した63人のうち約8割の51人が溺死や溺死疑いだった。半

数以上が屋内で発見されており、河川の急激な増水で逃げ遅れた人が多かったとみられる。

特別警報は台風の場合、中心気圧が930hPa以下または最大風速50hPa以上など発令の指標があり、事前に警戒を呼びかけやすい。ただ今回のように積乱雲が次々と発生する線状降水帯による豪雨は、現在の技術では正確な予測は困難という。

合、中心気圧が930hPa以下または最大風速50hPa以上など発令の指標があり、事前に警戒を呼びかけやすい。ただ今回のように積乱雲が次々と発生する線状降水帯による豪雨は、現在の技術では正確な予測は困難という。



孤立集落からヘリコプターで救助された人たち（8日、熊本県球磨村）

込めなかった」と明かし、東京女子大の広瀬弘忠は「高齢者や障害者、妊婦などの災害弱者は避難に一定の時間がかかる。雨の強まった夜間に警報が出る」と避難が間に合わない危険だ」として「結果的に特別警報が出ないと、最悪の事態を想定して早めに特別警報の可能性だけでも伝えるべきだ」と話している。

気象庁によると、前線は15日朝にかけて西日本から東日本を通過し、同日は新たな低気圧が日本海から東日本に接近。前線や低気圧に暖かく湿った空気が流れ込み、西日本や東日本は大気の状態が非常に不安定になる。

西・東日本で再び大雨恐れ 豪雨の死者72人に 梅雨前線や低気圧の影響で14日の西日本と東日本は雷を伴う1時間に50〜80mmの非常に激しい雨が降る地域がある。気象庁は13日、これまでの大雨で災害リスクが高まっている地域を中心に土砂災害、河川の増水・氾濫、浸水に嚴重な警戒を呼び掛けた。

長野県飯田市では12日夜、斜面が崩落。土砂の中から救出された同市の牧内正継さん（73）の死亡が確認された。一連の豪雨の死者は九州4県で68人、愛媛県で2人、長野、静岡両県で1人ずつの計72人。

豪雨 熊本の犠牲者8割「溺死」

発令直後に氾濫、逃げ遅れか